

八幡太郎

楠山正雄

青空文庫

日本にほんのむかしの武士ぶしで一番強ばんやかったのは源氏げんじの武士ぶしでございませう。その源氏げんじの先祖せんぞで、一番ばんえらい大将たいしょうといえは八幡太郎はちまんたろうでございませう。むかし源氏げんじの武士ぶしは戦いくさに出でる時とき、うじがみ氏うじがみ神かみさまの八幡大神はちまんたいじんのお名なを唱となえるといつしよに、きつと先祖せんぞの八幡太郎はちまんたろうを思おもい出して、いつも自分の向むかかって行く先さき々ざきざきには、八幡太郎はちまんたろうの霊れいが守まもつていてくれると思おもつて、戦いくさに励はげんだものでした。

八幡太郎はちまんたろうは源頼義みなもとといふ大将たいしょうの長男ちやうなんで、おとうさんの頼義よりよしが、ある晩ばん八幡大神はちまんたいじんからりつばな宝剣ほうけんを頂いたいたといふ夢ゆめを見ると、間まもなく八幡太郎はちまんたろうが生まうれました。七つの年としに石清水いwashimizu八幡はちまんのお宮みやで元服げんぷくして、八幡太郎はちまんたろう義家よしいえと名なのりましました。

義家よしいえは子供こどもの時ときから弓ゆみかうまくつて、もう十二、三という年としにはたいいの武士ぶしの引ひけないような上じやうず手てな弓ゆみを引ひいて、射いれば必ずかならあ当あたるといふ不思議ふしぎなわざをもつていました。

ある時清原武則というこれも弓の名人で名高かつた人が、義家のほんとうの弓勢を知りたがって、丈夫な鎧を三重ねまで木の上にかけて、義家に射させました。義家はそこらにある弓に矢をつがえて、無造作に放しますと、鎧を三枚とおして、後ろに五寸も鏃が出ていました。

二

大きくなつて、義家はおとうさんの頼義について、奥州の安倍貞任、宗任という兄弟の荒えびすを征伐に行きました。その戦は九年もつづいて、その間にはずいぶんはげしい大雪に悩んだり、兵糧がなくなつて危うく餓え死にをしかけたり、一時は敵の勢いがたいそう強くつて、味方は残らず討ち死にと覚悟をきめたりしたこともありましたが、その度ごとにいつも義家が、不思議な智恵と勇気と、それから神様のよきな弓矢の技で敵を退けて、九分九厘まで負け戦にきまつたものを、もり返して味方の勝利にしました。

それで戦えば戦うたんびに八幡太郎の名が高くなりました。さすがの荒えびすもふる

え上^あがつて、しまいには八幡太郎^{はちまんたろう}の名^なを聞^きいただけで逃^にげ出^だすようになりました。
 けれども、強^{つよ}いばかりが武士^{ぶし}ではありません。八幡太郎^{はちまんたろう}が心^{こころ}のやさしい、神様^{かみさま}のよ
 うに情^{なさ}けの深^{ふか}い人^{ひと}だということ、敵^{てき}すらも感^{かん}じて、慕^{した}わしく思^{おも}うようになりました。
 それはもう長^{なが}い長^{なが}い九年^{ねん}の戦^{たたか}いもそろそろおしまいになるうという時^{じぶん}分^{ぶん}のことでした。
 ある日はげしい戦^{いくさ}のあとで、義家^{よしいえ}は敵^{てき}の大^{たい}将^{しょう}の貞任^{さだとう}とただ二人^{ふたり}、一騎^{きう}打^{うち}ちの勝^{しょう}
 負^ぶをいたしました。そのうちとうとう貞任^{さだとう}がかなわなくなつて、馬^{うま}の首^{くび}を向^むけかえし
 て、逃^にげて行^いこうとしますと、義家^{よしいえ}は後^{うし}ろから大^{こえ}きな声^{こゑ}で、

「衣^{ころも}のたては

ほころびにけり。」

と和歌^{わか}の下^{しも}の句^くをうたいかけました。すると貞任^{さだとう}も逃^にげながら振^ふり向^むいて、

「年^{とし}を経^へし

糸^{いと}の乱^{みだ}れの

苦^{くる}しさに。」

とすぐ上^{かみ}の句^くをつけました。これは戦^{いくさ}の場^{ばしよ}所^{じよ}がちようど衣^{ころも}川^{がわ}のそばの「衣^{ころも}の館^{たて}」
 という所^{ところ}でしたから、義家^{よしいえ}が貞任^{さだとう}に、

「お前の衣ももうほころびた。お前の運ももう末だ。」

とあざけつたのでございませう。すると貞任も負けずに、

「それはなにしろ長年の戦で、衣の糸もぼらぼらにほごれてきたからしかたがない。」
とよみかえしたのでした。

これで義家もいかにも貞任がかわいそうになって、その日はそのまま見逃してかえしてやりました。

けれども一度は逃がしてやつても、いつたい運の尽きたものはどうにもならないので、間もなく貞任は殺され、弟の宗任も生け捕りになって、奥州の荒えびすは残らず滅びてしまいました。そこで頼義と義家の二人は九年の苦しい戦の後、生け捕りの敵を引き連れて、めでたく京都へ凱旋いたしました。

三

京都へ帰つて後、敵の大將の宗任はすぐに首を切られるはずでしたけれど、義家は、

「戦がすんでしまえば、もう敵も味方もない。むだに人の命を絶つには及ばない。」
 と思ひました。そこで天子さまに願つて、自分が御褒美を頂く代わりに、宗任はじめ敵のとりこを残らず許してやりました。その中で宗任はそのまま都に止まつて、義家の家来になりたいたいというので、そばに置いて使うことにしました。

宗任はいったん義家に命を助けてもらつたので、たいそうありがたいと思つて、義家の徳になつくようになったのですが、元々人を恨む心の深い荒えびすのことですから、自分の一家を滅ぼした義家をやはり憎らしく思う心がぬけません。それでいつか折があつたら、殺して敵を討つてやろうとねらつておりました。けれども義家の方はいっこう平気で、昔から使ひなれた家来同様宗任をかわいがつて、どこへ行くにも、「宗任、宗任。」とお供につれて歩いていました。

するとある晩のことでした。義家はたつた一人宗任をお供につれて、ある人の家へたずねに行つて、夜おそく帰つて来ました。宗任は牛車を追ひながら、今夜こそ義家を殺してやろうと思ひました。そこで懐からそろそろ刀を抜きかけて、そつと車の中をのぞきますと、中では義家がなんにも胸にわだかまりのない顔をして、すやすや眠つていました。宗任はその時、

「敵のわたしにただ一人供をさせて、少しも疑う気色も見せない。どこまで心のひろい、りっぱな人だろう。」

と感心して、抜きかけた刀を引っこめてしまいました。そしてそれからはずっと義家になつて、一生そむきませんでした。

それからまたある時、義家はいつものとおり宗任を一人お供につれて、大臣の藤原頼通という人のお屋敷へよばれて行ったことがありました。頼通は義家にくわしく奥州の戦争の話をさせて聞きながら、おもしろいので夜の更けるのも忘れていました。ちょうどその時、このお屋敷にその時分学者で名高かった大江匡房という人が来合わせていて、やはり感心して聞いていましたが、帰りがけに一言、

「あの義家はりっぱな大将だが、惜しいことに戦の学問ができていない。」
とひとり言のようにいいました。するとそれを玄関先で待っていた宗任が小耳にはさんで、後で義家に、

「匡房がこんなことをいつていました。何もわからない学者のくせに、生意気ではありませんか。」

といつて、怒っていました。けれども、義家は笑つて、

「いや、それはあの人のいう方がほんとうだ。」

と云つて、そのあくる日改めて匡房のところへ出かけて行つて、ていねいにたのんで、戦の学問を教へてもらふことにしました。

四

するうちまた奥州に戦争がはじまりました。それは義家が鎮守府將軍になつて奥州に下つて居りますと、清原真衡、家衡という荒えびすの兄弟の内輪けんかからはじまつて、しまいには、家衡がおじの武衡を語らつて、義家に向かつて来たのでした。

そこで義家は身方の軍勢を率いて、こんども餓えと寒さになやみながら、三年の間わき目もふらずに戦いました。

この戦の間のことでした。ある日義家が何気なく野原を通つて行きますと、草の深く茂つた中から、出し抜けにばらばらとがながたくさん飛び立ちました。義家はこれを見てしばらく考えていましたが、

「野にがなが乱れて立つたところをみると、きつと伏兵があるのだ。それ、こちらから先へかかれ。」

といいつけて、そこらの野原を狩りたてますと、案の定たくさんの伏兵が草の中にかくれています。そしてみんなみつかつて殺されてしまいました。その時義家は家来たちに向かつて、

「がなの乱れて立つ時は伏兵があるしるしだということは、匡房の卿から教わった兵学の本にあることだ。お陰で危ないところを助かった。だから学問はしなければならぬものだ。」

といいました。

こんどの戦は前の時に劣らず随分苦しい戦争でしたけれど、三年めにはすつかり片付いてしまつて、義家はまた久し振りで都へ帰ることになりました。ちようど春のこと、奥州を出て海伝いに常陸の国へ入ろうとして、国境の勿来の関にかかりますと、みごとな山桜がいつぱい咲いて、風も吹かないのにはらはらと鎧の袖にちりかかりました。義家はその時馬の上でふり返つて桜の花を仰ぎながら、

「吹く風を

なこそその関とせき

思えどもおも

道も狭みちせに散ちる

山やまぎくら桜ぎくらかな。「

という歌うたを詠よみました。

これは「風かぜが中なかへ吹ふきこんで来きてはいけないぞといいつて立たてた関所せきしよであるはずなのに、
 どうしてこんなとなおにみち通とり道みちもふさがるほど、山やまぎくら桜ぎくらの花はながたくさん散ちりかかるのでああらう。
 「といいつて、桜さくらの散ちるのを惜おしんだのです。

五

八幡太郎はちまんたろうの名なはその後のちますます高たかくなつて、しまいには鳥とりけだものまでその名なを聞きいて恐おそれたといいわれるほどになりなりました。

ある時とき、天子てんしさまの御所ごしよに毎まい晩ばん不思議ふしぎな魔物まものが現あらわわる時とき、その現あらわわれる時刻じこくになると、天て子しさまは急きゆうにお熱ねつがでて、おこりといいうはげしい病やまいをお病やみになりなりました。そこで、八はちまま

幡太郎はたらうにおいていつけになつて、御所ごしよの警固けいこをさせることになりました。義家よしいえは仰せをうけると、すぐ鎧直垂よろひたれに身を固めて、弓矢ゆみやをもつて御所ごしよのお庭にわのまん中に立つて見張りみはりをしていました。真夜中まよなかすぎになつて、いつものとおり天子てんしさまがおこりをお病やみになる刻限こくげんになりました。義家よしいえはまつくらなお庭にわの上につつ立つて、魔物まものの来くると思おもわれる方角ほうかくをきつとにらみつけながら、弓ゆみづる、絃つるをぴん、ぴん、ぴんと三度さんどまで鳴なりました。そして、

「八幡太郎はちまんたろう 義家よしいえ。」

と大きな声こえで名なのりしました。するとそれなりすつと魔物まものは消きえて、天子てんしさまの御病氣ごびょうきはきれいになおつてしまいました。

またある時とき野原のほらへ狩かりに出いかけますと、向むこうからきつねが一匹びき出て来きました。義家よしいえはそれを見みて、あんな小ちいさなけものに矢やをあてるのもむごたらしい、おどしてやろうと思おもつて、弓ゆみに矢やをつがえて、わざときつねの目の前まえの地じびたに向むけて放はなしますと、矢やは絃つるをはなれて、やがてきつねのまん前まえにひよいと立たちました。するときつねはそれだけでもう目をまわして、くるりとひつくりかえると思おもうと、そのまま倒たおれて死しんでしまいました。

またある時とき義家よしいえが時ときの大だい臣じんの御堂殿みどうどののお屋敷やしきへよばれて行いきますと、ちようどそ

ここには解脱寺げだつじの観修かんしゅうというえらい坊さんや、安倍晴明あべのせいめいという名高い陰陽師おんみょうじや、忠明ただあきらという名人の医者いしやが来合きあわせていました。その時ときちようと奈良ならから初はつもののうりを献けん上じょうして来きました。珍しい大めづらきなうりだからというので、そのままお盆ぼんにのせて四人にんのお客きやくの前まえに出だしました。するとまず安倍晴明あべのせいめいがそのうりを手にのせて、

「ほう、これは珍しいうりだ。」

といつて、眺ながめていました。そして、

「しかしどうも、この中には悪いものが入はいっているようです。」

といいました。すると御堂殿みどうどのは解脱寺げだつじの坊さんぼうさんに向むかって、

「ではお上しょうにん人にん、一つ加持かじをしてみても下ください。」

といいました。坊さんぼうさんが承知しょうちして珠数じゆずをつまぐりながら、何か祈ないはじめますと、不思議ふしぎにもうりがむくむくと動うごき出だしました。さてこそ怪あやしいうりだということで、お医者いしやの忠明ただあきらが針療治はりようじに使う針はりを出だして、

「どれ、わたしが止とめてやりましょう。」

といいながら、うりの胸中どうなかに一一ふたところ所はまで針はりを打うちますと、なるほどそのままうりは動うごかなくなつてしまいました。そこで一いばんおしまいに義家よしいえが、短刀たんとうをぬいて、

「ではわたしが割つて見ましよう。」

といいながらうりを割りますと、中には案の定小蛇が一匹入っていました。見ると忠

明のうった針が、ちやんと両方の目にささっていました。そして義家が、無造作に切り込んだ短刀は、りっぱに蛇の首と胴を切り離して

ました。
御堂殿は感心して、

「なるほどその道に名高い名人たちのすることは、さすがに違ったものだ。」
といいました。

六

八幡太郎は七十近くまで長生きをして、六、七代の天子さまにお仕え申し上げました。ですからその一代の間には、りっぱな武勇の話は数しれずあつて、それがみんな後の武士たちのお手本になったのでした。

青空文庫情報

底本：「日本の英雄伝説」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年6月10日第1刷発行

入力：鈴木厚司

校正：大久保ゆう

2003年9月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

八幡太郎

楠山正雄

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>